



1970年の松林(名取市撮影)



捨てるために集められた三保松原の松葉(2018年2月)

「松葉さらいは うんと楽しいの」

く、三保松原の松葉の山も捨てるしかないのが現実だ。

宮城県名取市の海岸林近くにあった北釜集落でも、ガスが普及するまで松葉は貴重な燃料だった。ここで生まれ育った人々は毎年、「松葉さらい」という作業に携わっていた。

もう様子を実際には見ることができず、イメージがつかみにくいのだが、熊手で集めたマツの落ち葉を、袋や紐などを何も使わず大きな卵型の塊(これを「カツツゲ」と呼んだ)に固めるのが肝らしい。カツツゲづくりはおもに女性の仕事だったが、かなりの熟練を要し、慣れないと熊手で松葉を集めただけの簡単な作業に回された。

晩秋から正月前まで行われたという松葉さらいは年長の女性が万事を取り仕切り、カツツゲの出来のよし悪しをチエックしたり、おしゃべりしてサボる若いお嫁さんを叱つたりした。

「年とつたばあさんは『あ

その嫁はだめだ』とかおつ

る静岡県の三保松原をことし2月に訪ねたとき、白砂青松の浜辺と遠くの富士山という絶景のほかに、目についたものがあつた。高く積まれた半透明の大きなゴミ袋である。中身はすべてマツの落ち葉だった。

三保松原の松林はざっと30ha、3万本。そこからいったいどのくらいの落ち葉が出るものなのだろう。静岡市観光交流文化局文化財課は、正確なデータはないというが、ごく一部を調べたところ、1.5m²の松林から57.5kgの落ち葉を回収したという。単純に計算すると、30haの松林からは110トンあまりも出ることになる。うず高くもあるわけだ。

秋から冬にかけて、松林から枯れた落ち葉を取り除くことは、かつては二重の意味で大切だった。土壤の富栄養化を防いでマツの成育に適した環境を守るために、そして、松葉を燃料として活用するためである。しかし今日、肥料としての使い道はない。肥料などに使えないか研究は進められているが、まだ決め手はない。

よみがえれ! 海岸林

東日本大震災復興支援「海岸林再生プロジェクト10ヵ年計画」を、元日経新聞論説委員の小林省太がさまざまな角度でお伝えします。

Vol.2



北釜集落は太平洋と仙台空港の間に広がっていた(赤枠内、1999年9月撮影)(-社東北地域づくり協会提供)



鈴木かつ子さん(左)と櫻井やへのさんは、昔の北釜の生活を懐かしそうに語った(2016年5月)

世界文化遺産に選ばれている海岸林は、ほとんどが人工林である。名取の海岸林はどうのようにしてつくられたのだろう。宮城県などによると、1600年に伊達政宗が領内の砂浜への造林を命じたのがそもそも始まりで、遠州(静岡県浜松市)から取り寄せたタネで翌年から苗木の育成をはじめ、順次海岸に植え付けられていったという。しかし、古文書などを通じて当時の仙台藩の藩政を研究する菊池慶子・東北学院大教授は「(政宗の功績とする説は)確証的な事実ではない」と記している。

菊池教授によれば、史料で裏づけられる仙台湾岸の海岸林造成の始まりは1650年ごろ。1701年の絵図には

名取付近の海岸林がすでにくつきり描かれている。「政宗公ゆかり」か否かは別として、

江戸時代前半の間には防潮、防風のための海岸林が広く形成されていたわけだ。1953(昭和28)年に宮城県林務部などが出版した「宮城県の海岸林」は、「仙台藩65万石の維持がこの海岸林の造成管理によってなされたと云うても敢えて過言ではない」と海岸林のインフラとしての価値を強調している。

暮らしの中で遠景に退いていく

その後は仙台藩や各地の領主、地元住民も植え付けや手入れに精を出した。ただ、枯れる木もあれば用材や薪として伐られる木もある。飢饉のときはマツの皮を剥いで粉にし、穀物とまぜて餅をつくよりもした。もちろん災害もあるし開発で大きな面積が消えてしまうこともある。こうして「失われては植え」は戦後まで繰り返された。そんな証の一つが今も残っている「愛林碑」だ。1959(昭和34)年に建てられた



北釜集落の櫻井さんの自宅があった辺り。何本かのマツが残っていた(2018年5月)

親子の記憶が重なったのは「お仕置きの場」としての松林だった。そのころ、小高くなつていた林は「山」と呼ばれていた。親は「山さ連れていくぞ」と言つていたらずらしくらいでした。おじいちゃんが猫の子を林の中に捨てて泣きながら探しに行つたのを覚えていました

とはあっても、林の中で遊んだ記憶はないという。「うつそうとしていて、野球のボールが入っちゃうと『しようがないや』と探しに行くのも諦められるくらいでした。おじいちゃんが猫の子を林の中に捨てて泣きながら探しに行つたのを覚えていました」

菊池教授によると、江戸後期の1801年、全国を測量して歩いた伊能忠敬一行が北釜に入り、「家五十一軒」という記録を残している。北釜の姿を今に伝える唯一の文字情報だという。北釜は小さな集落で、長い間にわたって決して便利な場所ではなかった。はじめて路線バスが通ったのは重夫さんが小学校4年のとき。これがスクールバスとしても使われ、重夫さんも4km離れた小学校にこの

た子どもを脅し、子は「一度入つたら出てこられない」とおびえて謝る。平成になると、海岸林はそんな場所にもなつていた。

重之さんがその価値を知った数少ない経験は、自宅のすぐ東側に広がる松林が日射しを遮つてしまふなど祖父に訴えたときだという。「おじいちゃんに、あれは防風林といつて伐つちゃいけないものなんだと教えられたんです」

伊能忠敬によると、江戸後期の1801年、全国を測量して歩いた伊能忠敬一行が北釜に入り、「家五十一軒」という記録を残している。北釜の姿を今に伝える唯一の文字情報だという。北釜は小さな集落で、長い間にわたって決して便利な場所ではなかつた。はじめて路線バスが通ったのは重夫さんが小学校4年のとき。これがスクールバスとしても使わ

れた小学校にこの病気などで「パー」になることも少なくない。一方、コマツナやチングンサイは2ヵ月足らずで収穫でき、大儲けも

「キタカマクイーン」の名もついたメロンは1月の播種から6月の収穫まで手間がかかり、値段も外見に左右される。専業、兼業の農業だった。

「北釜」という集落の名は住所ではなく、名取市下増田字屋敷という。下増田にあつた7つの集落のうちで一番貧しかったという人もいる。

伊能忠敬の時代から2000年を経て、震災前には109世帯、約400人がここに住んでいた。そのうち70世帯が

できないがリスクも小さい。そのため、メロンは市場に出さずに知り合いに売る「庭先販売」が多くなり、主力産品は徐々に葉物になつていった。2009年のはじめだから震災の2年前である。そんな集落に1980年生まれの若い写真家、志賀理江子さんがたまたま住み着き、「町の写真家」として集落の行事などを撮りながら住民一人ひとりから個人史や生活の聞き取りを行つた。そのときに志賀さんが「いろいろな人の口から何度も出てくる」と気づいた言葉を本に書き記している。「どこさも行かねえ」という言葉である。

☆次回は10月号に東日本大震災発生のころについて書く予定です。



〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5
TEL(03)3322-5161 FAX(03)3324-7111
E-mail:kaiganrin@oisca.org

■海岸林再生プロジェクトホームページ
<http://www.oisca.org/kaiganrin/>

ブログは毎日更新中!

オイスカ 海岸林

検索



ミックス

責任ある木質資源を使用した紙

FSC®

C016564

プロジェクトへのご支援・ご協力お願いします!

- 郵便局から(お名前・ご住所・電話番号などを払込取扱票に明記してください)
口座記号・番号……00100-6-482316
- 加入者名……海岸林再生募金
- 銀行から(お名前・ご住所・電話番号などは別途下記にお知らせください)
銀行名……三菱UFJ銀行 永福町支店(支店番号347)
口座……普通 0054080
名義……公益財団法人オイスカ(コウエキサイダンホウジンオイスカ)

よみがえれ! 海岸林



愛林碑は津波に流されず今も海岸に建っている(2014年1月)

碑には、旧陸軍飛行場建設のため農地を接収された北釜の人びとが代替地の国有海岸林を開墾したこと、小さくなつた海岸林を補強して農地を守るために湿地帯に10年がかりで防潮林を造成したことが、携わった人の名とともに記されている。

開墾組合や共用林野組合の役員として碑に名が刻まれているのは、かつ子さんやへのさんの親たち。碑文は二人が通つていた小学校分校の先生の筆によるものだ。「先生は特別習字が上手だったね。奥さんは裁縫の先生で、農閑期になると裁縫習つたのね」。かつ子さん、やへのさんも戦後に結婚してから、クロマツの苗を植えたことがある

そうだ。この作業は「松子植え」と呼ばれた。もう一つ、草刈りも集落にとって大切な仕事だった。松林の管理といふより、刈った草をたい肥や牛、馬、豚の飼料にするからである。林の入り口には交代で「番人」が立ち、決められた時間では中に入れなかつた。抜け駆けは許されず、ヨーリドンで「草刈り競争」をしたという。

太平洋岸に近い現在の名取市東部は、平坦で肥沃なことから「名取耕土」と言われていた。海岸の松林はその耕土を潮風や砂から守つていただけではない。集落の人びとに燃料や飼料も供給していた。

しかし、北釜の人びとの話から、今日は近づくにつれて松林がどんどん暮らしの遠景

に退いていったことがはつきり分かる。

「松林のありがたみ? はつきり言ってあんまり感じなかつたねえ」というのは櫻井重夫さん(67)。重夫さんは北釜身も北釜でメロンやチングンサイ、コマツナをつくり始めた。東日本大震災の後も場所を移して農業を続けている。

「名取市海岸林再生の会」の副会長でもある。震災前、集落の周辺にはビニールハウス約1千棟が立ち並んでいたが、農家にとって、海岸林は道路などが当たり前のものが当たり前」のインフラだったのだろう。

それでも、重夫さんの世代だと落ち葉や松かさを燃料に使つたり、キノコを食べたりと、いう「松の恵み」を覚えているし、子どもたちの頃の遊び場所としての記憶も鮮明だ。松かさは学校のదるますトープにくべただけではない。「戦争」



松林の中にあったプールが子供たちにとっては格好の遊び場だった(1965年ごろ/名取市撮影)

あれは伐つちゃいけないものだ

重夫さんの長男、重之さん(31)は横浜に住んで会社員生活を送っている。物心がついたのは平成になつてからで、松林を切りひらいてつくりたグラウンドやブールで遊ぶことを称して松かさをぶつけ合ながら林の中を走り回つたという。「マツの木4本をロープで囲んでリングにして、なかなかの四角いところでプロレスもやつたねえ」